

歴史は形を変えて繰り返す！歴史(戦略)に学ぶ企業経営

明治時代は歴史の分岐点

- 前月号
1. 歴史は繰り返す
 2. 明治時代の主な出来事
 3. 明治時代とは
 4. 歴史は「人」や「集団」「組織」が創る
- 今月号
5. 版籍奉還から廃藩置県へ
 6. 西南戦争とは
 7. 西南戦争の背景は
 8. すべてに満足する者はいない

5 版籍奉還から廃藩置県へ

明治になって、新政府が初めて行ったのは、天皇を中心とする政權体制を固める事であった。まず、諸藩に領地と領民を天皇に返上させる「版籍奉還」で、薩長土肥(薩摩・長州・土佐・肥前)が手本を示す事で、他の藩もそれに従った。

明治初期には二官六省(神祇官・太政官・民部省・大蔵省・兵部省・刑部省・宮内省・外務省)が置かれたが、政治を動かす参議のほとんどは薩長土肥の出身者であった。版籍奉還を実施したものの旧藩主が藩政に当たっていた為、新政府の体制強化にはさほど効果がなく、藩の反発も強かった。そこで参議らは「廃藩置県」の断行を密かに画策する。



西郷隆盛が中心となり、薩長など

らが西郷を擁して挙兵、熊本鎮台(熊本城)を包囲したが、政府軍に鎮圧され、西郷は郷里の城山で自刃した。明治維新政府に対する不平士族の最後の反乱。

7 西南戦争の背景は…

西南戦争の背景には士族の強烈な反政府風潮があった。廃藩置県後、近代化を急ぐ政府は、秩禄処分(歳出の3割にも及ぶ旧武士、公卿たちの秩禄(家禄、賞典禄)を廃止)、徴兵制、廃刀令など領土制解体の政策を強行したので、士族の地位と生活が激変し、彼らは封建的特権を奪われて大量に没落した。しかも、維新の功績に慢心した政府高官は、専制的傾向を帯び、腐敗状況も現れたので、士族の反政府気分が高まった。

1873年の朝鮮使節派遣をめぐる政府分裂(征韓論に端を発した明治6年の一大政変。当時の政府首脳である参議の半数と軍人、官僚約600人が職を辞した。征韓論政変とも言われる。)で西郷隆盛、板垣退助らが下野すると、これに続いて鹿児島や高知出身の近衛兵(君主を警衛する君主直属の軍人または軍団)多数が辞職、帰郷し、反政府士族グループの核となった。鹿児島県で

は、桐野利秋、篠原国幹、村田新八らが私学校を組織し、士族の教育、共済にあたった。県令大山綱良(旧薩摩藩士)は、私学校派士族と結び、彼らを県政の要職に任命し、政府の集権政策に抗して独自の経済・社会政策を進めたので、鹿児島県は政府に敵対的な独立国の観を呈した。また、士族の反政府風潮を背景に、74年以来、憲法制定、国会開設を求め自由民権運動が高まり、板垣ら土佐立志社士族がその中心となった。これに対し、政府の大久保利通や伊藤博文は、1875年の大阪会議で板垣らの入閣を図り西郷派を孤立させようとした。

1876年に入ると、反政府状況はいっそう深刻になった。地租改正に不満を抱く農民は、茨城、三重、愛知、岐阜、堺(現在の大阪府の一部)および奈良県などの各県で大規模な起こし、政府に衝撃を与えた。他面、熊本(神風連の乱)、福岡県秋月の乱、山口県萩の乱など各地の士族は相次いで反乱を起こしたが、彼らは西郷の決起を期待していた。西郷は、好むと好まざるとにかかわらず、士族の反政府運動のシンボル視されるに至った。このような難局に直面して、政府は鹿児島士族を反政府の拠点とみなし、その掃滅を図って、密偵派遣など内部破壊工作を試みた。



中小企業診断士・
社会保険労務士・販売士
大野実雄氏
●プロフィール(オオノ ジツオ)
メーカー、経営コンサルティング
ファームを経てオオノ経営労務事
務所開設。「変化には変化でしか
対応できない」を企業支援の基本
としている。著書に「売れるように
売れば必ず売れる」「働き方 生き方
こころの軸」「勝つ企業」等がある。

から政府直属軍の兵士1万を集め、計画断行に欠かせない軍事力を整えた。藩主の権限を奪う廃藩置県は、実質的には藩へのクーデターともいえる。藩の大きな反乱がなかったのは奇跡と言え、殆どの藩が財政赤字で、抵抗する力が残っていなかった。また、諸藩も海外列強に対抗する為には、日本の中央集権化が必要だと考えていたと思われる。

6 西南戦争とは…

明治10年(1877)、西郷隆盛らが鹿児島で起こした反乱。征韓論に敗れて帰郷した西郷が、士族組織として私学校を結成。政府との対立がしだいに高まり、ついに私学校生徒

8 すべてに満足する者はいない

完璧は求めない！完璧な経営者や上司はいない、完璧な部下もいない。相手の欠点や弱点は非難・批判できる。相手の欠点があるのは相手の弱みを補う能力があるからである。相手よりも優れたものを持っているから弱みに気がつく。相手の欠点や弱みを責めない。責めるために企業(組織)にいるわけでない。相手の弱点を補ってあげるために組織(集団)がある。すべてに満足する者はいない。不平不満は誰にでもある。不平不満をぶつけるところを間違えない。反社会的、反規則、反ルール、反組織、反上司はダメ。不平不満をエネルギーに「カエル」。仕事の達成感・満足度・自己成長・レベルアップ・顧客満足に向ける。

歴史は、今を経営する者がより良い事業を展開するために、先人が遺してくれた経営の鑑でもあります。

* 史実は諸説があります。本文とは異なる説もありませんのでご了承ください。
* 参考文献：明治政治史(吉波文庫)
*イラストはイメージです。